

テーマ：

神の法

「聖伝」と「聖書」

私たちは、「正教会は伝統のある教会である」とよく言いますが、それは具体的に何を指しているのでしょうか。

正教会では、「神の啓示」を人々に知らせるものとして二つの方法を用いています：それは「聖伝」と「聖書」です。

「聖伝」とは、神を熱切に信じ、尊崇した人たちが、言葉と模範をもって代々伝えてきた信仰の教えであり、神の法であり、機密であり、作法であります。これらの聖伝を守っている人たちの集まりを「教会」と言います。教会の歴史を振り返ると、最初の間人間アダムから預言者モイセイまでの時代、聖書は存在しませんでした。（主イイスス・ハリストスも、この世におられた間、本によって人々を教えたのではなく、自分の言葉と自分の行いをもって人々を教導しました）。このように教会において最初にあったのは「聖書」ではなく「聖伝」なのです。（「聖書」が必要になったのは、地上に人間が増え、広範囲な地域でさまざまな言語を使って、さまざまな生活様式をするようになった人々に神の教えをより正確に伝える必要が出てきたからです）。

例えば、私たちは祈祷のときに十字を描きますが、十字の描き方について聖書の中に書いてある箇所はありません。12大祭の中には生神女就寝祭がありますが、聖書の中に生神女の就寝について書いてある箇所はありません。聖書の中に洗礼が大切であることは書いてありますが、父と子と聖神^oの御名により三回水をかける奉神礼規則は書いてありません。私たちは教会において最も大切なものであるご聖体を聖体礼儀において拝領しますが、この聖体機密の奉神礼規則は聖書には書いてありません。実はこれらのことを全世界の正教会が今日まで全員同様に忠実に守っているのは、正教会にある「聖伝」のおかげなのです。聖使徒パウエルは、テサロニケ人への手紙の中で、「聖伝」をきちんと守ることが大変重要であることを説いています。「聖伝」は、「聖書」と別物なのではなく、「聖書」の教えをより深く、より正しく吸収するために必要な“養分”のような働きをします。

正教会が「聖書の勉強会」のみを“勉強”とせず、聖堂での祈祷、私祈祷、斎、その他の信仰生活の実践そのもの（＝聖伝の実践）を「学び」とするのは、ここに根拠があります。

「正教会の伝統」を学ぶということは、別の言い方をすれば「聖伝」を学ぶことです。